2311　離島覚書（山口県・情島）

伊保田港から情島を望む

令和５年７月 27 日

再訪

情島（なさけじま）という名の島は瀬戸内海に２つある。広島県と山口県だ。山口県の情島は周防（すほう）大島の東端、伊保田港の沖に浮かぶ。この情島には 2012（平成 24）年９月 25 日に訪れているので、約 10 年ぶりの再訪になる。10 年前に訪問した時に帰りの電車の中でカメラを失くしてしまい、当時の写真が残っていないことが今回の再訪になった。

周防大島の西端の小松港からタクシーで伊保田に向かう。伊保田には柳井港から松山行のフェリーが寄港するので、フェリーを利用した方がだいぶ料金は安いが、午前中は笠佐島に出かけていたのでタクシーを利用するしかなかった（バスを乗り継ぐことも可能だが、おそろしく時間がかかる）。途中、周防大島町役場の大島庁舎にある政策企画課に寄って資料をいただく。周防大島は久賀（くか）町、大島町、東和町、橘町の４つの行政区にわかれていた。2004（平成 16）年 10 月に合併して周防大島町となり、現在は１町１島である。周防大島町は旧町毎に有人離島を１島抱えており、情島は合併以前、東和町に属していた。ちなみに笠佐島は大島町、前島は久賀町、浮島（うかしま）は橘町にそれぞれ属していた。

伊保田港は工事中のため、情島行の船の発着場は従来よりも東側に移動していた。伊保田で唯一と思われる「油田ふれあい店」で弁当とお茶を買い、仮設の待合室で昼食を食べる。

乗客は私の他に何れも高齢の男女それぞれ１名であった。乗務員２名、乗客３名を乗せた町営連絡船「せと丸」（4.8 トン）は 14 時 30 分に離岸した。料金は往復 480 円である。10 年前の運賃は 280 円であったから、だいぶ値上がりしていた。連絡船は１日３便運航されている点は変わらない。

10 年前は朝１便で情島に渡ったが、その時は、情島小中学校の教員３人、山口県漁協東

和町支所の職員１人、通勤と思われる１人と私の合計５人が乗船した。10 年を経ての大きな変化は、児童養護施設「あけぼの寮」と小中学校、そして漁協の支所が廃止になっていたことである。当時、連絡船は島に通勤する人たちの足となっていたが、現在は高齢化した島の人たちの買い物や通院などの足としての役割に絞られている。したがって利用者も大きく減っている。１便あたり１人か２人しか乗客はいないし、場合によってはゼロの時もあるから、町営でなければやっていけない。

情島と周防大島の間は「情の瀬戸」と呼ばれ、潮流が極めて早い。10 年前に来た時には波立つ瀬戸に多くの漁船が集まってハマチを釣っていたのが印象に残っている。約 15 分で情島・本浦の港に着いた。

町営渡船・せと丸（左）、波立つ情島の瀬戸（右）

４つの集落

情島は面積 1.0 ㎢、周囲 6.9 ㎞の北西～南東方向に細長い島で、標高 100ｍを超える山地（最高点は 173ｍ）が海岸に迫り、平地はほとんどない。伊保田港の眼の前に情島が横たわっているが、集落は北東側に位置しているため伊保田港から見ることができず、無人島と勘違いしてしまうだろう。

情島は北から伊ノ浦、大畑、本浦、佛ノ浦の４つの集落で構成されていた。しかし、現在、大畑には人は住んでいない。各集落とも背後に山が迫り、典型的な純漁村の趣が残る。連絡船は中心集落の本浦に着いた。乗客のうち男性は最も外れの伊ノ浦の住民で、歩いて向かった。女性の方は本浦の住民であった。

乗客の男性によると４つの集落に実際に住んでいる人は、伊ノ浦：４人（５戸）、大畑：０人（１戸）、本浦：20 人（23 戸）、佛ノ浦：４人（５戸）の合計 28 人である。なお（　）内は 10 年前に訪れた時の世帯数である。この時は人口を聞いていなかった。

国勢調査時の人口は 1960（昭和 35）年の 432 人であったが、その後減少の一途を辿っており 2010（平成 22）年は 93 人に減っていたが、2015（平成 27）年に 62 人となり、さらに 2020（令和２）年は 33 人、19 戸になってしまった。近年の大きな減少は後述するように大畑集落にあった「あけのぼ寮」の廃止が影響している。ちなみに５月末時点の住民基本台帳上の人口は 33 人、24 戸である。

今回の再訪では、港に誰もいなかった。10 年前との比較のため情島の本浦に当時の情景を紹介しておこう。

朝早かったので朝食の準備が間に合わず、宿で巻き寿司を用意してくれたので道端に腰をおろして食べた。すぐに野良猫が寄ってきた。この島は猫が多い。前の家の漁師と思われる老人が私の様子を観察するために出てきて、「漁師はつまらん」といって引き上げていった。連絡船の発着場の正面に山口県漁協東和町支所の情出張所がある。船で一緒だった漁協職員が事務所でやはり朝食の弁当を食べていた。出張所には常勤の職員はおらず、大島から朝一便で通勤し、荷受業務が終わると戻るようだ。

事務所に顔を出し、情島の漁業や流通のことを聞く。しかし、島の出身ではないので、詳しい様子はわからないという。どうやらあまり興味がないようだ。そのうち、漁師が事務所にやってきた。職員は一緒に船に乗って漁港内にある生簀に行き、釣ってきた魚の荷受作業をしていた。何人かの漁師がこれに続いた。本浦の漁港にはおよそ 20～30 隻の小型漁船が係留され、それぞれに小さな生簀がつながれている。

漁港の岸壁でヤスを持ってウロウロしている 60 歳後半とおぼしき人に会った。伊保田の出身で現在は広島に住んでいるが、兄弟のいる島に昨日から遊びに来ていると言った。何でもヤスで港内に入ってくるエイを突くのだそうだ。漁港内には釣った魚が活けてあるので、それを狙ってエイがやって来るらしい。大きいエイは体重 60 kg、長さは 1.2mになり、この大物を先日突いたそうだ。味をしめてまた狙いに来たという。エイは盆から正月までの期間、港に入ってくるらしい。アサリを食害するナルトビエイはいないかと聞いたが、この島にはいないそうだ。

10 年ぶりの今日、漁港には誰もいなかった。漁船数も大幅に減っている。この間、高齢化した漁師が大量にリタイアしてしまったに違いない。

本浦

本浦は港の正面にある公民館を境に東と西に分かれている。集落を見下ろす東側の小高い場所に情島神社がある。水軍の将・村上武吉が 1601（慶長６）年に建立したと言われている由緒ある神社だ。急な階段を登って神社を参拝したが、周囲は樹木に囲まれ、見晴らしはよくない。

本浦の集落（左）、情島神社（右）

10 年前に来た時には、神社の脇から上に登る道があり、南向きの斜面には階段状に墓石が並んでいた。墓からは眼下に本浦の集落、漁港、そして沖にはたくさんの島々、さらに四国本島を見渡すことができ、素晴らしい眺望であったが、今回の再訪では墓のある位置

は草木で覆われ、登り口もよくわからない状況であった。恐らく過疎と高齢化が進んだ情島では、険しい坂を登って墓の周囲の草刈りやお参りをする体力が残っている人は皆無に近い状態なのかもしれない。この 10 年で墓は荒れ放題になっていた。

なお、情島に寺はない。島民は伊保田と油宇にある寺の檀家になっている。

フェリー・ふたばの遭難

本浦から伊ノ浦に向けて海岸沿いにコンクリート舗装の道路が整備されている。ただ軽自動車がやっと通れるほどの狭い道だ。最初のカーブの場所に「ふたば海難慰霊之碑」が建っていた。10 年前に来た時には島民によって花が手向けられているが、今回はなかった。

私が情島のことを初めて知ったのは、「漁業・漁村の多面的機能」の検討をしていた時のことである。当時、委員をしていただいた広島大学の故地井昭夫先生から情島でフェリーの衝突事故があり、島民総出で救助にあたったことを聞かされた。漁村の存在が事故の犠牲者を少なくした意義は大きく、この事例を「国民の生命・財産を守る機能」として評価した。

慰霊碑の眼の前に無人島の諸島（もろしま）がある。事故は両島の間の諸島水道で 1976（昭和 51）年７月２日に発生した。宮崎県細島港より広島市宇品港に向かって航行中の日本カーフェリー株式会社の「ふたば」（1,933 総トン）が同日夕方諸島水道にさしかかった際、19 時 45 分に大型貨物船グレート・ビクトリー号（7,519 総トン）と衝突、浸水した。「ふたば」には大人 55 人、幼児３人の乗客と乗員 29 人の合計 87 人が乗っていた。元日本カーフェリー㈱の藤中恒夫さんの「海難実態の報告」によると、「甲板部員はシューター、ライフラフトの投下準備に入ったが、多数の漁船が接近し、（中略）縄梯子で漁船への移乗の方がよいと判断した船長の命により、（中略）、縄梯子を準備し、19 時 54 分退船命令が出され、一等航海士の指揮により、後部プロムナードデッキに誘導されていた旅客を縄梯子により漁船に移乗させ、20 時 08 分旅客の移乗を完了した」とある。

フェリーふたばの慰霊之碑（左）、フェリーふたばの遭難海域（右）

日本カーフェリー株式会社の役員、従業員が建之したこの碑には、「折しも付近操業中の東和町漁業協同組合情島支所所属の漁船約 30 隻の献身的救助活動により、行方不明の４名を除く生存者は全員救助されました」と感謝の言葉が記されている。救助した遭難者は島の公民館に収容され、婦人会が炊き出しをして面倒を見た。島の漁師の多くが漁船に乗って乗客を助けに行き、当時情島漁協の組合長は東京に招待されてこの件で表彰を受けて

いる。ちなみにこの時、情島から 30 隻の漁船が救助に向かっているが、今の情島の漁船数は実質５隻ほどにとどまっている。

「ふたば」は 20 時 40 分に横転漂流し、21 時 30 分に水深 81mの海に藻屑と化した。今もこの海底に眠っている。毎年、慰霊祭を開かれているが、歳月の経過とともに参加する人が少なくなっているという。

古老の人生

次の集落が大畑である。10 年前に訪問した時には児童養護施設「あけぼの寮」と町立情島小中学校があり、吉田順一さんという漁師が一人だけ住んでいた。当時はすでに 88 歳だったから亡くなられているかもしれないが、旧宅だけはそのまま残されていた。10 年前に吉田さんからお聞きした内容を再録しておく。

伊ノ浦からの帰り道、大畑の集落へ下る峠で吉田順一さん（88）に追いついた。高齢だが、現役の漁師である。アジを釣りに出かけ、漁船を伊ノ浦の漁港に係留して家に戻る途中だった。足が弱っているため電動車椅子で坂を登ってきた。この日の午後、奥さんの妹さんが島に来るので、食卓に並べるために魚釣りに出かけたのだと言う。車椅子の下のスペースにはアジが 10 数匹収納されていた。ハマチも釣れているが、高齢の吉田さんには大きな魚を抱えるのは大変なので、アジのような小魚を狙うらしい。足は不自由だが操船は達者というから驚くばかりだ。

今も残っていた吉田順一さんのご自宅

峠でしばらく話を聞いていたら、家で話そうと招待されたので、坂を下ったところにある吉田さんの家に上がり込み、続けて話を聞いた。奥さんが居るはずだったが、あいにく自転車で本浦の方に出かけたようで留守だった。茶の間には全国各地の観光地の提灯が飾られていた。旅行が好きだったのかもしれない。

吉田さんの自宅は大畑地区にある。大畑地区には以前は８戸の住宅があったが、現在は吉田さんのところ１戸のみで、後述するあけぼの寮と情島小中学校が隣接する。

吉田さんは情島の小学校を卒業し、呉の高等小学校に進学した。その頃は伊保田から広島県の呉まで客船が通っていたそうだ。高等小学校卒業と同時に、呉の海軍工廠に勤め、終戦まで働いた。長男で跡取りであったことと、母親が不自由だったこともあり、終戦と同時に情島の実家に戻った。以来 60 年間一本釣一筋で生計を立ててきた。一本釣の収入で、吉田さんは男３人、女１人の４人の子供を育てた。長男、次男は大竹市に住み、三菱レーヨンに勤務、長男は最近定年を迎えたらしい。３男は大阪市に、娘は徳山市に嫁いでいる。奥さんは隣の本浦の出身で、島内結婚であった。

島には田んぼはなかったが、畑作は営まれており、裸麦と芋を主に栽培していた。隣の小中学校の用地は以前、畑だったという。米は島外から購入し、麦と混ぜて炊き、基本的に自給自足の生活をしていた。畑作による自給自足が生活のベースになっており、魚は重

要な現金収入源であった。芋は冬から春まで芋倉に入れて保存し、ふかしてよく食べたそうだ。男は米を比較的多く食べたが、女は麦が多かったという。ただ、米を混ぜず麦飯ばかりの時もあったというから、情島では米はまさに貴重品だった。

梶子とあけぼの寮

吉田さんの家の隣には「あけぼの寮」、これに隣接して町立情島小中学校があった。「あけぼの寮」は昭和 26（1951）年に東野父子が私財を投げ打って開設したもので、開設当初は戦災孤児を受け入れていた。その後、家庭のさまざまな事情で親元を離れた子どもたちがここで生活しており、山口県に移管された。そして 2017（平成 29）年３月に閉鎖されている。入口の記念碑には 1951 年～2017 年までの期間に約 700 人の子どもを育んだと書かれていた。「ありがとう情島」の石碑には 12 人の手形が押されていたので、閉鎖当時の児童生徒数は 12 人だったと思われる。

10 年前に訪れた当時は、小学生６人、中学生 14 人の合計 20 人が在籍しており、全員が「あけぼの寮」の寮生で、すでに島の出身者はいなかった。この施設が情島にできたのは、歴史的に深い訳があるので、この点を紹介しておこう。

後述するように情島の漁業は一本釣を専業としていた。一本釣の漁場は潮流が早いところほど好漁場になる。今のようにエンジンがなく、和船を櫓で漕いだ時代に早い潮の流れの中を一人で釣るのは難しい。艫で櫓を漕ぎ、漁船を定置させる働き手が必要だった。この働き手を「梶子（かこ）」と称した。子供のいる家では梶子を確保できたが、いない家では他所から雇わなければならなかった。

伊予（現在の愛媛県）の方には貧しい家の子を梶子として世話をする人がいて、情島では伝統的にこの子供を労働力として活用してきた。沖縄では「糸満売り」がよく知られているが、同じような仕組みである。６～７歳の子どもが島に預けられ、梶子として働き、17～18 歳になって一人前になると独立し、伊予に帰った。あるいはそのまま島に住みつく人もいた。子供がいない家ではたいていこの梶子を雇っていた。吉田さんが生まれる前から島にこの制度があり、吉田さんの子供時代には島に 20 人ほどの梶子がいたそうだ。

梶子は漁師の家族と同じものを食べ、小さな部屋も与えられて、風呂にも入った。また、梶子が島を出るときには僅かばかりの金を渡していたようだ。しかし、戦後、この梶子が急速に減ったため戦災孤児を斡旋するものが現れ、この中には不良もいた。梶子が悪いことをしたので、お仕置きにダンベに入れておいたところ死ぬという事件が起き、島から逃げ出したものが警察に捕まったことから大騒ぎになり、人身売買の島としてセンセーショナルに報じられ、大きな社会問題になった。

これからは宮本常一の「周防大島」からの引用になるが、「事件の後始末のためにこの島を訪れた県の役人は、島の環境のよさと、島民の純朴さに眼をつけて、この島に障害児の保護施設を作るとよいのではないかと考えて島民に話しかけた。これを受けて立ったのが東野恭彦氏であった。そして障害児のための寮をつくった。これがあけぼの寮である」。

なお、この事件をヒントに「怒りの孤島」という映画がつくられ、映画では児童虐待として扱われたが、島の人たちにはそんな気はなかった。身寄りのない子を育て、漁撈技術をおぼえさせて一人前にしたというのが実際のことで、「糸満売り」と同様である。「情島

には恩がある」と梶子の息子が語り、連合艦隊司令長官の山本五十六が情島に来た時、土足で漁船に乗り込んだ長官を梶子が注意したところ長官は素直に従ったというエピソードも残っている。

梶子事件の詳細な経過とあけぼの寮の設立については、加登田恵子の「児童福祉法体制受容のプロセスー舵子事件をめぐってー」に詳しい。

なお、今回の再訪の帰り道、栄幸タクシーに乗って安下庄（あげのしょう）の千鳥旅館まで送ってもらったが、その女性の運転手は情島の出身で、彼女の家にも梶子がいたという。障害をもつ捨て子で、身元が分かったが本人が両親のもとに帰りたくないといって情島の彼女の家に残った。お祖父さんは彼女の父親と同じように兄弟同然に育て、彼女の家で生涯を終えた。遺骨は実家の墓に埋葬したが、命日には花を送っていると話していた。

あけぼの寮の建物（左）、「共生と共育」を掲げたあけぼの寮の記念碑（右）

情島小中学校

「あけぼの寮」の道路を挟んだ東側に町立情島小中学校の校舎が残されている。海岸道路の右手が海で防波堤が続き、左側に鉄筋コンクリート３階建てと木造２階建ての古い校舎が並ぶ。

校舎の裏側が校庭になっているが、海岸沿いの道路からは内部を見ることはできない。すでに無人となった校舎の裏手に回る。雑草はきれいに刈られ、今のところ管理は行き届いているようだ。狭い校庭を挟んだ反対側に３階建ての建物があり、１階が講堂、２、３階が教員住宅になっていたようだ。

情島小中学校は 1888（明治 21）年に油田尋常小学校の情島分教場として設置されている。2017（平成 29）年３月に休校となり、128 年に及ぶ歴史を閉じた。

ピーク時の 1959（昭和 34）年には 122 人の児童生徒が在籍していたが、2006（平成 18）年 12 月に島内の子どもがいなくなってからは「あけぼの寮」に在籍する子どものみとなっていた。そして「あけぼの寮」の閉鎖によって情島小中学校も閉鎖される事態となったのである。

ちなみに旧東和町には９つの小学校があったが、現在は東和小学校１校に集約・再編されている。属島の情島に限らず、周防大島においても過疎化は止まらない。

近年、道路に面した防波堤にこの小中学校の卒業生が壁画を残してきたが、海に向かって最も左側のものが休校記念の壁画であった。七福神と情島特産のマダイが描かれていた。

町立情島小中学校の旧校舎（左）、子どもたちが休校を記念して防波堤に描いた壁画（右）

伊ノ浦

大畑までは海岸沿いの平坦な道であった。伊ノ浦へは険しい峠を越えなければならない。渡船で一緒だった伊ノ浦に帰る老人は休み休み歩いていた。私は写真を撮ったり、石碑を観たりしながら伊ノ浦に向かったので、老人を追い越したり、追い抜かれたりしながら伊ノ浦まで行くことになった。この峠は高齢者には辛い坂である。上述したように 10 年前にこの峠で吉田さんにお会いした。

峠から山側に登るわき道があり、その先に墓地があった。おそらく伊ノ浦の集落の先祖代々の墓地であろう。階段状に 20 基ほどの墓石が並ぶが、墓の周りには草が多い。本浦の墓地と同様、険しい坂を登らなければならないから、高齢者にとって墓参りは大変な務めとなっている。なかなか墓参りにいけないから、墓は荒れる事態となっているわけだ。

峠を下った先に漁港があった。漁船が５隻係留されていた。斜路も整備されているが、陸揚げされている漁船はない。この漁港は伊ノ浦と大畑の漁業者が使っており、10 年前に訪れた時には８隻だったから、さらに減少したことになる。船で一緒だった老人は数年前に漁業をリタイアしているので、おそらく実際に操業に使われている船は皆無と思われる。

漁港の先に伊ノ浦の集落が形成されている。山を背負うように 10 数軒の家が建つ。この一帯は急傾斜地崩壊危険区域に指定されている。すでに家が解体撤去されて、空き地になっている土地も目につく。かの伊ノ浦の住人によると、伊ノ浦に住むのは４戸４人というから、残っている家の大部分は空き家なのだろう。背後の山はかつて段々畑がつくられ、自給的農業が営まれていたと思われるが、今は元の山に戻っている。集落の先は山が海に迫り、行き止まりになった。

10 年前に伊ノ浦の集落の人と話した場所に、当時と全く同じようにベンチが置かれていた。ここで伊ノ浦に住む老婆と話をしている。その時の聞き取り内容を記しておこう。

ベンチで話を聞いた老婆は肌の色が異様に黒かった。腎臓が悪く、週に３回人工透析を受けるために周防大島の病院に通っていた。足が不自由なため定期船の発着場まで歩くことができず、目の前の漁港から夫の漁船で大島まで連れて行ってもらっていた。この人は浮島の出身で、情島に嫁いできた。娘が３人いて、岩国に住んでいると言っていた。10 年前の伊ノ浦の世帯数は５戸７人で、うち漁師が２戸、残りの３戸は女性の単身世帯であった。空き家になっている４軒は、病気で子供のところに行っている人と施設に入っている

人で、島を離れていた。

伊ノ浦の漁港区域（左）、伊ノ浦の集落（右）

恐らくこの女性もすでに亡くなっているだろう。今回、伊ノ浦では誰にも会わなかった。15 時 42 分に本浦に向けてＵターンした。

一本釣専業の島

本浦の漁港（油田漁港の分港、第１種）には漁船が５隻横付けされており、岸壁と漁船の間に木製の生簀が浮かんでいる。５隻の漁船のうちの１隻だけに漁師がおり、釣りの仕掛けを作っていた。「濱丸」といった。島の全船がこの時間帯は出漁していないと言っていたので、現在情島の漁師は５人とみていいだろう。10 年前の 20～30 隻から大幅に減ったことになる。

情島の漁業は一本釣のみで網仕事はない。同じ離島でも網漁が中心の浮島とは対照的である。これは、島の成立過程と関係があるかもしれない。情島と愛媛県津和地島との間の海域は昔から一本釣の好漁場であった。江戸時代中期に伊保田あたりから情島に人が渡ってきて住みつくようになったと言われていることから、昔からの伝統的な漁業が引き継いだものと考えられる。移住者は漁業を主として営み、段々畑を開墾して自給的な農業で暮らしを支えてきた。

10 年前に聞いた話では、「一本釣の漁獲対象は、春はマダイ、スズキ、夏はアジ、ハマチ、秋も魚種は同じだが漁獲量は少なくなる。冬はメバルとマダイに対象種は変わる。昔は、エビやイカなどの活餌を使っていた。地元では活餌を獲る漁業がなかったので、周防大島の油宇から求めたそうだ。しかし、今はマダイの浜値が下落し餌に経費をかけられないことから、疑似餌になった」ということだったが、最近はアジの漁獲がめっきり減っているという。

釣果は潮に大きく左右され、潮の流れが激しい海域が好漁場となることはすでに述べた。瀬戸内海は潮汐流が発達し、しかも島が多いことから海峡部では潮流が助長される。情島周辺はこうした条件のところが多い。釣果は潮汐と密接に関係するため、小潮よりも大潮時、1 日のうちでも漲潮、落潮時が釣るタイミングである。このため、操業時間は１～２時間で、時間帯も日によって変わってくる。

釣った魚は基本的に船のイケマに活かして持ち帰る。港には各自が木製の生簀を保有しているので、ここで活かしておき、集荷にやってくる仲買業者に販売する。

10 年前に来た時は漁協の出先があったので、ここで荷受けし、漁港内に設置してある生簀に活かしていた。13 時ごろに広島県廿日市から仲買業者（ハマスイ）が受け取りに来て、翌朝、広島市中央卸売市場等に出荷していた。ハマチが多く獲れた時には、午前と午後の２回集荷に来ることもあるらしい。瀬戸内海の島々では、昔から船で魚を集める出買船（仲買業者）が発達していたが、周防大島周辺で唯一その仕組みが残っているのが情島である。ただ、漁協の出張所はすでに廃止されており、現在の流通はどうなっているのかわからないが、高齢の漁業者が多く、自ら消費地市場に出荷するのはほぼ無理と考えられるので、基本的には 10 年前の出買船方式が踏襲されているものと推定される。

一本釣は経費がほとんどかからない。網などの漁具は不要で針とテグスがあればいい、基本的に活魚で取り扱うので氷も不要だ。また、漁場も近いので燃油が少なくて済むなどのメリットも大きい。しかし、網漁業に比べると漁獲量は格段に少ない上に、最近は釣り魚の価値が評価されなくなっており、単価の下落が著しいことから、釣り漁業の経営は大変厳しくなっている。「濱丸」の話では、今の漁師は「嫁が来ない」ので結婚できないという。したがって「釣り」の漁師を継ぐ人はいないと断言していた。

情島漁港の漁船（左）、木製の生簀（右）

魚価の下落と乱獲

情島の釣りの対象種は、マダイとハマチがメインである。この両魚種は今では代表的な養殖魚であり、周年を通じて安定的に供給されている。

かつて情島の釣りマダイは評価が高く、20 年以上前には 3,000 円／kg 以上もしていたが、10 年前の時点ですでに 1/3 以下の 800～900 円／kg に下落していた。一方、ハマチも１尾 400 円ほどの状態であった。産地価格の下落によって漁業収入は減少、後継者の確保を妨げてきた最大の要因である。釣りものの良さが価格面で評価されれば、経費がかからないメリットが経営面で生きてくるが、どうも最近はこうした釣りものの良さ（高鮮度、活〆、無傷）が評価されなれなくなってしまった。

現在ではマダイとハマチの供給は養殖魚がベースになっていて、天然物はスポットで供給される。天然魚中心であった時代と明らかに異なり、天然魚は養殖魚の価格を下回る相場で推移しているわけだ。

近年、アジやメバルが減っているという。また漁協合併によって従来の単協の枠組みが撤廃され、それまでは一本釣のアジロ（漁場）には入ることがなかったボラたたき網漁業

などが漁場を広げて地先まで入ってくるようになったという。本来はボラを獲るための漁法であるにもかかわらず相対的に単価の高いタイやメバルを狙って獲っていく。ライトをつけて魚を脅してとるため乱獲状態になり、資源の減少が釣り漁業に大きなダメージになっているというのだ。

価格の下落と資源の減少の二重苦が「漁師はつまらん」「漁師に嫁は来ない」という理由になっている。

行商船

10 年前に情島に来た時、本浦の漁港には行商船が来ており、島民の生命線となっていた。当時の様子を再録しておこう。

島には商店も食堂もない。唯一の自動販売機が漁協前に置かれているが、漏電事故で故障したまま放置されている。島の人の食料・日用品は週に３回（火曜日、木曜日、土曜日）やってくる行商船が頼りだ。当日は行商船がやってくる日だった。

佛ノ浦の集落から戻り、トンネルを過ぎたあたりに島の女性３人がたむろして世話話をしている。付近に猫も集まっていたが、島に１匹いる猿に猫の子供が食べられてしまったことが話題であった。どうやら行商船を待っているようだ。大畑の吉田さんの自宅でお茶とお菓子を御馳走になったものの、腹が減ってきたので行商船から昼食を調達することにし、島の女性達と一緒に行商船を待つことにする。

13 時半すぎに行商船がやってきた。トンネルの入り口は漁港の奥にあたるがここに船を係留し、食料品を陸揚げ、トンネル前の路上に商品を並べた。行商船は比較的若い男性がやっており、作業は手際良かった。野菜類、果物類、菓子、牛乳、卵、肉等少量ずつ何でもそろっている。島の女性達は数日分を購入、手押し車に乗せて、引き上げていった。私は大きなアンパンと野菜ジュースを購入。冷蔵庫はないのでジュースはぬるい。朝食と同様、道端に腰掛けて食べた。

顧客は私と後から来た人を含めて５人。売上はせいぜい数千円のレベルである。ここでの販売が終わると、トンネルの中に保管してあったミカン運搬用の三輪車に商品を積み込み、次の販売先に向かって走って行った。本浦の東、さらに伊ノ浦まで行くのだろう。島の唯一の自動車がこの三輪車である。高齢で歩行も容易でない人が多く、行商船はいわば島の生命線ともいえる。１日の売上げはどのくらいなのか、経営的に成り立つのかと考えを巡らした。

10 年後に訪れると、この行商船は廃止になっていた。結局、需要が減りつつけ、経営が成り立たなくなったのだろう。現在は、弁当を買った伊保田の唯一の商店である「油田ふれあい店」（農協のＡコープとヤマザキショップの共同経営店）が電話で注文を受け、連絡船で島に運んでいるようだ。

佛ノ浦

本浦からトンネルを抜けた先の小さな集落が佛ノ浦である。本浦と佛ノ浦は眼と鼻の先だが、トンネルができたのは 60 年ほど前だ。それまでは山に登って通ったそうなので、随分不便であったと想像される。当初は岩を砕いただけの簡素なトンネルであったが、その

後、コンクリート製につくりかえられた。

トンネルの手前の道路は崩落していた。車は通れず、かろうじて人が歩いて通れるほどの道が確保されている。10 年前に行商船が店を開いた場所である。トンネル内には当時使われたミカン運搬用の三輪車がそのまま置かれていた。

トンネルを抜けると佛ノ浦である。現在は２戸４人が住んでいる。背後に山が迫り、山腹にへばりつくように家が建つ。集落には５軒ほどの家が残り、一番下の段の家は解体撤去され、現在は耕地になっている。集落の前に防波堤が作られ、その下に消波ブロックが並ぶ。漁港はないから隣の本浦の漁港を利用していたのだろう。

以前、この集落でプロパンガスの集金をしている小島さんという人に会ったことがある。当時の年齢は 40 歳代であったから、現在は 50 歳代になっているだろう。情島の本浦出身で、伊保田に住んでいた。小島家は 1600 年代に情島に移住してきた最初の家で、家には刀が残っていると言っていた。佛ノ浦の集落は小島さんが子供の頃は 15 戸あったが、平成に入るころに 10 戸に減少、10 年前には５戸になり、このうち漁業を営むのは３人であった。しかし２戸に減った現在、漁業者はいないだろう。

情島では以前マツタケがたくさん採れた。木造船の時代は船に虫がついたので、山から松葉やシダを採ってきてこれを燃して駆除した。松葉を利用し、松林の手入れもしていた時代はマツタケが獲れたが、船がＦＲＰに代わり、山が荒れるにつれ、マツタケは採れなくなったという。

崩落した佛ノ浦に至るトンネルの入口（左）、佛ノ浦の集落（右）

18 時 20 分発の町営渡船に乗り、約 10 分後に伊保田漁港に着いた。船着場には栄幸タクシーが待機していた。そのまま、安下庄の千鳥旅館に直行する。

【文献】

宮本常一（2008）：私の日本地図９、瀬戸内海Ⅲ　周防大島、未来社

宮本常一（1994）：宮本常一著作集、周防大島を中心としたる海の生活誌

加登田恵子（2009）：児童福祉法体制、受容のプロセスー舵子事件をめぐってー、山口県立大学学術情報、第２号、社会福祉学部紀要.